教育みかわ

第141号

副会長挨拶
三教研に望むこと
（豊川・田原・碧南支部）
学校自慢（高浜支部）
支部トピックス（幸田支部）
教室の窓から（北設支部）
私の研究（安城支部）
研究大会の報告
調査委員会報告
授業力養成講座
教育随想

三河教育研究会　令和６年３月８日

うん、きみ　わるくないよ

三河教育研究会　副会長　後藤　理恵

十月、授業の中で子どもたちが変わる瞬間に立ち会うことができました。それは、授業力養成講座秋期講座、生活科二年生の授業でした。参観者をお客さんに見立てて「赤坂おさんぽ写真展」のリハーサルをし、最後に感想を伝え合っていました。話すことに不安をもつ子もいたそうですが、自分の写真に込めた思いについて、誰もが自分の言葉で話し、質問にもしっかり答えていました。「口から言葉がたくさん出た。質問してくれたからうれしかった。それも入れてもっとくわしく話せた。本番もできそう……。」子どもたちの表情や言葉は、リハーサルを通して成長を実感した自信にあふれていました。自信をもつことで子どもは変わる。まさに、小さな自己実現の瞬間でした。

担任のころの私は、子どもたちに本気になる楽しさ、みんなで成し遂げる喜びを味わってほしいと、鼓舞し続ける毎日でした。立場が変わった今は、もう少し長い目で子どもたちの成長を見守っています。種をまき、水を切らさないようにして花が咲くのを待つイメージでしょうか。

私の勤める東栄小学校には「のびのびタイム」という時間があります。子どもたちが自らの力で全校活動を企画、運営する場として、年間十時間ほど設定しています。人数や学年に関係なく自由に企画でき、東栄小オリジナルの遊びが次々誕生しています。企画側には思いがあります。これまでの遊びで感じた小さな不満の解消だったり、新たな遊びへの挑戦だったり……。当日思い通りにならない場面ももちろんあります。しかし、大きな失敗で終わったことは一度もありません。高学年を中心に全校で盛り上げようと協力するからです。自分のアイデアが形となり、みんなが楽しんでくれる。これも小さな自己実現だと感じています。

授業力養成講座講師の四天王寺大学准教授、原田三朗先生は「現場の教育論」（東洋館出版社）の中でこう述べています。「周りの人たちによる見守りや支えのなかで、小さな自己実現を積み重ねることができた子どもたちは、水たまりに映った自分に、きっと、こう言えるようになるのではないでしょうか。　うん、きみわるくないよ。」

「研究」のススメ

三河教育研究会　副会長　夏目　貴司

三河教育研究会の役員を務めて二年、本会の成り立ちを学び直すとともに、諸事業に立ち会う機会を得る中で、三河各地の実践力や組織力にふれ、日々の業務に埋没させてはならない、「研究」という視点の大切さをあらためて思いました。

それはもちろん、科学的に検証できると同時に、机上の理論に留まることなく、子どもと向き合ってこそ感じられる、熱く躍動する血の通った営みでありたいと思います。子どもの、もっと知りたい、よりよくしたいという真っすぐな思いに対し、しっかりと応えられる構想を練って、教師自身も子どもとともに高まりを自覚できる、そんな「研究」こそ、私たちの三河教育が誇るべきものです。

中堅教員の頃には、目の前の「この子」に願いをかけ、研究構想を立案し、実践を展開する推進力の中心・研究主任の立場を経験させてもらいました。ただ、今思うと、始点は確かに「この子」であっても、事象に対する目の付け所、手だてを講じる切り口などに、文字通りの「鋭さ」や、「斬新さ」を求め過ぎたのではという自問が残ります。不易と流行のバランスは、常に意識したい指標です。

学校経営をする立場になって、より一層、子どもが伸びるとともに、教師が研鑽を積む現職研修のあり方を思うようになりました。教師一人一人の授業力を高めながら、学校力を向上させるには、意欲的な挑戦と、それを支援・調整し、成果を反映し得る、学校経営全般にわたっての「研究」的な構えが求められます。それはまさに、私たちが本会から学び続けてきた三河の風土に重なると思います。

折から、勤務校で大きなチャンスを得ました。全国の校長会組織の委嘱による、昨夏の愛知大会での研究発表です。「特別支援教育の推進を担う教職員の育成を図る学校経営」の取組は、特別支援学級での指導の一翼を担う若手教師の育成に留まらず、学校全体がより子どもと向き合える展開につながりました。教師それぞれの得意を活かした、子どもとの「つながりカテゴリー」の設定から、子どもの内面に迫る実践は、目新しさはなくとも、「実践的」で、「ほっこりする」などの反響をいただき、不易の方向に舵を切った成果を感じるものとなりました。

いつ、どんな立場でも、三河の教育現場にある私たちは、子どもとのつながりから学べる、温かい「研究」の営みを大切に前進していきたいと思います。

三教研に望むこと

教員の教科専門性を磨く場

豊川市立萩小学校
柴田信明

「三教研造形教育部」といえば、私が教員新米時代からお世話になっている組織です。その始まりは昭和二十四年と「三河教育研究会のあゆみ」に記されています。その後、昭和三十六年の三教研の創立までに、算数科、社会科、音楽科、国語科と、続けて研究会が発足したことにより一つの組織になったことがわかります。当時の先輩方の、授業力、実践力を高めねばならないという必要感と熱意が、三河を舞台にした研究会を創り上げたのです。この結成の背景を考えると、三教研は三河の教員がそれぞれの教科研究を深め、教科専門性を磨く場として貴重な研修の場と言わざるを得ません。

私たち図工美術科の教師は、他校の取組について、児童生徒の作品を通して関わり合っています。三教研造形部では、各地区の作品展の開催情報も共有しています。互いの地区の生の児童生徒作品を鑑賞することで、実践を学ぶ貴重な機会となっています。我が市は他地区の作品展に足を運び、リサーチし、教師だけの参考題材集をつくることもしました。これも三教研で得た、教科のつながりのおかげだと感じます。

また、三河各地で行われる三教研造形部夏季研修会では、毎回、地域素材や題材についての出会いや体験があります。講演では造形教育の視野を広げるお話を聞くことができます。このような機会に恵まれることに本当に感謝しています。

今、働き方改革の中、研修のあり方も見直されています。その中でも、教員の本来業務である教科専門的な研修の機会が必要となっています。校内において活発な教科研究ができればよいのですが、とくに教科専門の少ない教科については、校外とのつながりが必要です。郡市内のつながりもありますが、この「三教研のつながり」は、貴重な研究組織です。今後、小学校においては専科化が進んできます。教師が、柱となる教科をもち、その教科の専門性を磨く場が必要です。あらためて、広く三河をつなぎ、実践を学ぶ三教研という研究組織が重要な役割を担う時が来たのではないかと感じています。

校内での教科研究は「縦の糸」、他校とのつながりは「横の糸」といえます。それでいうと、三教研は長い横糸でしょう。その両方の糸を上手に織りなすことで、一枚の広く三河を包み込む布となるのではないでしょうか。

今こそ三教研の理念の継承を

田原市立福江中学校
井本教貴

今後生きていく子どもたちの未来は、これまで以上に加速度を増して、複雑で予測困難な社会になっていくと言われています。そうした社会で生きていく子どもたちにとって大切なのは、自分が多様な可能性をもった存在であること、一人ひとりが互いの異なる背景を理解すること、自分の得意分野の能力を伸ばすことであると思います。

そうした時代だからこそ、これまで三教研に携わった先輩方が、長い歴史の中で築き上げてきた「目の前にいる一人ひとりの子どもたちを大切にする教育」という理念に立ちかえる必要があると考えます。

例えば、児童観生徒観から始まる指導案や児童生徒の思いや考えの詰まった座席表などはその最たるものと言えます。

田原市には、三河地方出身ではない先生方が多く赴任されています。また、地域ごとに背景が違い、育ってきた子どもたちの特性もそれぞれの地域で違いがあります。そんな田原市だからこそ、今日にも活かせる三教研の理念を多くの先生方に丁寧に伝えていくことが重要であると考えています。そして、目の前の子どもたち一人ひとりの特性や思い、考えなどをとらえ、子どものもっている能力を伸ばすことができる教育を一層推進することが大切であると思っています。

「本物」の力

碧南市立鷲塚小学校
彦坂幸子

「おなかと心にドンときたよ。」

本校は今年度、開校百五十年を迎え、記念事業として、「和太鼓衆ＳＨＩＮ」による和太鼓演奏会を開催しました。和太鼓の迫力ある音、演者が全身で奏でる様子、ＭＣで夢を語る姿。子どもたちは目を輝かせ、体を揺らしたり手拍子をしたりして、和太鼓の世界を楽しんでいました。

また、十月に参加した研究発表会では、ゲストティーチャーからの学びを取り入れた実践を見せていただきました。ゲストティーチャーの経験から発せられる言葉を、体を前のめりにして聞き入っていた子どもの姿が印象的でした。

コロナ禍を経て、学校行事の中止や規模縮小、タブレット導入など、子どもたちを取り巻く学習環境は大きく変化しました。ただ、自分で実際に見たり聴いたりする「本物の力」に勝るものはありません。今後もできるだけ「本物」に触れ、「本物」から感じとる機会を大切にしていけたらと思います。

三教研は、三河各地の多くの先生方とつながり合ったり、実践を基に学び合ったりできる「本物」の組織です。これからも三河各地の実践や研究の成果を共有し、子どもたちの未来をつくっていきたいです。

学校自慢

高小温故知新

高浜市立高浜小学校

「すごくきれいな学校ですね。」

ここ数年、来校者を玄関でお出迎えすると、皆さん必ずこうおっしゃってくださいます。廊下も壁も温かみのある、明るめの木材を使用し、窓も大きく開放的なため、昼間はたくさんの日差しが入ります。また、屋上には、四つの「風の塔」が設置されています。それぞれ八枚ずつの窓が自動開閉することで、常に換気されるようになっており、子どもたちは、毎日気持ちよく過ごしています。

このような最新の設備となったのは古い校舎からの建て替えが完了し、新しい校舎になった五年前です。本校は、高浜市の中心から少し南下した所に位置し、在籍児童六百三十九名の中規模小学校です。昨年創立百五十年を迎えました。明治六年、学区の恩任寺の庫裡で創立され、その後、明治四十年に現在の場所に移り、平成三十年には、高浜市の地域交流施設として最新の施設に生まれ変わりました。同じ屋根の下には、児童センターや和室等が併設されています。体育館は二つあります。そのうち、授業や学校行事で使う体育館には、背面から電動で出てくる移動観覧席があり、三百席が備わっています。

このようにほとんどの設備は最新に変わりましたが、昭和五年に建てられた校門は変わらず残っています。太くて大きく、二本の石柱で作られた立派な門です。当時、学校の周りは当然ながら、アスファルトなどの舗装はされておらず、ただただ土の状態が広がっている様子が、古い写真から見てとれました。以後九十三年間、毎日登校してくる子どもたちをずっと見守ってくれています。

今日も校門の前で、笑顔で挨拶する子どもたち。これから長い時を経ても、変わらず静かにこの場所から見守り続けてくれることと思います。（文責・東　貴富子）

新校舎の前に立つ校門

支部トピックス

幸田支部

授業力向上を目指した取り組み
～一斉授業研究会の再開～

幸田町教育研究会

幸田町教育研究会には、教科を中心とした二十四の部会があり、各校から代表者が参加し、それぞれの研究主題に基づいた活動をしています。また、それらの部会は六つある研究部のいずれかに所属し、教職員相互の研修を深めています。

今年度は、平成二十九年度から隔年で行っていた一斉授業研究会を実施しました。前回は、コロナ禍によって紙面開催となりましたが、今回は、本来の姿で再開することができました。

一斉授業研究会は、各研究部の中から一つの部会が授業提案を行い、町内のすべての教員が、希望をもとにいずれかの授業研究会に参加をする取り組みです。今年度は、国語、道徳、学習情報、技術・家庭、保健、特別活動の部会が提案授業を行いました。講師には、幸田町以外の地区の校長先生をはじめ、大学教授、教育機関など、現在の教育情勢を踏まえた、高い見識をおもちの方をお招きしました。

こうした授業研究会では、主任や授業者を中心に、提案する部会が研究主題に沿った授業作りを進めるのはどこの地区でも見られますが、幸田町教育研究会の特色は、それ以外の教員の取り組みにあります。八月の終わりにある夏季事前検討会では、十月の授業研究会に向けて、すべての教員が参加して単元構想や本時案を検討する場がもたれます。授業作りの過程に参加することで、自らの授業を振り返り、検証する機会になります。その検討会には講師の先生も参加し、教科の特性を踏まえた指導法や考え方はもちろん、教科や学校の枠を越えて授業作りの工夫や悩みにも助言がいただけます。まさに、自らの授業力を向上させる機会とできる訳です。

「幸田町は、よい取り組みをしていらっしゃいますね。」

一斉授業研究会を終え、帰途につく講師の先生からいただいたお言葉を大切に、今後も授業力の向上に努めてまいります。（文責　荻谷小・井上　勝哉）

一斉授業研究会
技術・家庭科の授業の様子

教室の窓から

「関わり合い」を通して

設楽町立田口小学校
大橋弘登

「めっちゃとぶ！」
「たのしいね。」
生活科の学習で作った竹でっぽうを使って、休み時間も遊んでいる子どもたち。一年生は、全員で八人と少ない人数ですが、広い校庭に子どもたちの元気な声が響き渡ります。
今年度の生活科の学習では、「関わり合い」をテーマに、竹でっぽうを使った実践に取り組みました。本校では、地域の皆さん（学校応援団）の力をお借りして、様々な活動の計画を立てて、実践をしています。
六月には、学校応援団の方をお招きし、竹でっぽう作り教室をしました。大人の手を借りて、竹を切ったり、穴をあけたりする作業を子どもたちが自分で行い、竹でっぽうを作りました。
「竹のいい匂いがするね。」
「さわるとさらさらしているね。」
研ぎ澄まされた五感から感じ取った思いが、声となっていたるところから聞こえてきました。竹でっぽうの遊び方を教えていただき、楽しんでいると、
「いろいろな遊びをしたいね。」
とつぶやく子がいました。そこから学習は発展していきます。
友達との話し合いを通して、新しい遊びを創り出し、二・三年生と遊ぶことにしました。考えた遊びは、的当てゲームと水かけ鬼ごっこ。二・三年生の子どもたちも楽しんで遊んでくれました。もっと楽しい遊びにするために、アドバイスもくれました。
「点数をつけてゲームにするといいよ。」
「みんなが納得できるルールにした方がいいよ。」
一年生の子たちだけでは、思いつかないようなことも教えてくれます。
アドバイスを生かして遊びを練り直し、次は、来年度に本校と統合する田峯小学校に遊びに行くことにしました。
「一年生なのに自分たちで遊びを考えてすごいね。」
「竹でっぽうって楽しいね。」
田峯小学校の子どもたちも、本校の一年生を温かく迎え入れてくれました。
誇らしげな一年生の表情を見たとき、へき地ならではの「関わり合い」のよさを実感しました。

1・3年生合同授業

私の研究

個の学びを充実させ、仲間とともに、学びを深める子の育成

―二年「めざせ！おもちゃ作り名人」の実践を通して―

安城市立今池小学校
水越優香

一　はじめに

友達と関わり合う中で、自分の課題を解決するためにはどうしたらよいのかを考え、自ら検証していく個別最適な学びを継続することで、遊びや生活をよりよいものにしようという実践力を養いたいと考え、本実践を行いました。

二　実践「遠くまで飛ぶゴムロケットにレベルアップさせよう」

身近な材料を使って遊ぶ中で、児童が興味をもって遊ぶであろうゴムを使ったおもちゃに限定しておもちゃ作りを行いました。その中の一つにゴムロケットがあります。実際に作ってみると、期待していたようなよく飛ぶゴムロケットはなかなかできませんでした。振り返りには、「もっと遠くに飛ぶロケットにしたい」という意見が多く出ました。そこで、遠くまで飛ぶゴムロケットのひみつを伝え合う時間を設けました。「発射台を伸ばすとよい」「輪ゴムを重ねるとよい」など、発射台についてのさまざまな視点から意見が出ました。さらに、「発射台がぐらぐらして困った」という児童の意見に対し、丈夫な発射台ができていた児童を意図的に指名することで、「割り箸を重ねてテープをぐるぐる巻きにするとよい」という改善策を児童同士で見つけることができました。その後、すぐに改良して試す時間を設けました。材料コーナーでは、テープの巻き方や輪ゴムのつけ方を児童が教え合う姿が見られたり、お試しコーナーでは、飛ばし方をアドバイスしたりする姿が見られました。その日の振り返りでは、「Aさんの言った通り、テープをぐるぐる巻きにしたらよかった」「太い輪ゴムを使ったらよかった」など、友達の意見を聞いたり、教えてもらったりしたことでレベルアップすることができたという記述が多く見られ、友達と関わり合ったことのよさや楽しさを味わうことができました。

三　おわりに

生活科の学習では、「見付ける」「比べる」「試す」「見通す」「工夫する」といった、多様な学習活動ができるような場の設定や用具の準備を充分に行うことが大切だと改めて感じました。個の学びを充実させ、仲間とともに学ぶ児童の姿を求め、これからも研究を進めていこうと思います。

テープのつけ方を教え合う児童

研究大会の報告

へき地教育

ふるさとに夢や誇りをもって、
未来の創り手になる子どもの育成

第六十一回
愛知県へき地・複式・小規模学校
教育研究大会
期　日　十月二十日（金）
会　場　豊田市立大蔵小学校
西尾市立佐久島しおさい学校
参加者　大蔵小学校　百四十六名
佐久島しおさい学校　九十九名
公開授業　大蔵小学校　四学級
佐久島しおさい学校　六学級
研究発表
◎豊田市立大蔵小学校
地域で学び、友と高め合う
大蔵っ子の育成
―対話から深い学びを生み出す
学習づくり―
◎西尾市立佐久島しおさい学校
島に誇りをもち、未来を切り拓く
子どもの育成
～地域の人・もの・こととの
関わりを生かして～

本年度の研究大会は、大蔵小学校と佐久島しおさい学校の二会場で行いました。大蔵小学校は、豊田市教育委員会との共催で行われました。

大蔵小学校では、「対話的な学び」「対話トレーニング」「地域との連携」の三つの柱で、子どもの力を高めることに取り組みました。また、ＩＣＴ機器を活用し、地域の学校と連携して、対話的な授業に挑戦し、成果につなげました。

佐久島しおさい学校では、「義務教育学校だからできること」「佐久島だからできること」「少人数、複式だからできること」という三つの視点からよさをとらえ、そのよさを生かした特色ある学校経営に取り組み、成果を上げました。

未来の佐久島のために
私たちにできることを話し合う

地域の魅力を知ること

設楽町立田口小学校　松井　鮎子

友達を見て話す子どもの姿から、地域の「人」とかかわり、多くのことを学んだことがわかりました。また、自分の足で出向き、見て聞いて体験して感じた子どもたちの素直な言葉から、地域にある「人・もの・こと」と直接かかわることの大切さを感じました。

令和五年・六年度　実践事例集

「新しい時代に求められる教育」

―「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る授業実践―

調査委員会

三河教育研究会では、調査委員会を中心にして、諸事業の推進や、諸活動の充実を図るために主題を設定し、二年間の調査・研究を進めています。令和三年度から四年度にかけては、「新しい時代に求められる教育～主体的・対話的で深い学びの実現を図る授業実践Ⅱ～」を主題とし、実践事例集にまとめました。

令和五年度は、新たなテーマを設定し、令和六年度までの二年間をとおした実践の成果と課題を、実践事例集としてまとめ、学校現場へ還元する準備を進めていきたいと考えています。

まずは、教育の今日的な課題や、三河各地の学校現場の実情から、主題および副題を検討していくために調査をしました。各支部からは次のようなキーワードが寄せられました。

【各地区から寄せられたキーワード】
「特色あるカリキュラム」
「令和の日本型学校教育」
「個別最適な学び」
「協働的な学び」
「ＧＩＧＡスクール構想」
「ＩＣＴ活用」

三河教育研究会の「三河の風土に根ざし、子どもを中心に据えた教育を実践する」という理念を大切にしながら、現代の教育で求められている「主体的・対話的で深い学び」を推し進めていこうという意識がうかがえます。

そこで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」のそれぞれを重視した学びを実現させ、さらに、それらの学びを一体的に充実させていくことをめざしていきたいと考え、主題を「新しい時代に求められる教育～『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を図る授業実践～」としました。

本実践事例集は、三河の各支部における、小学校・中学校の実践事例を掲載します。各地区の価値ある実践を具体的な形で残すことで、私たち教員の資質・能力の向上に結びつけていくことができるようにしていきます。

令和七年二月の発刊に向け、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

＜報告＞

授業力養成講座

～中堅教員のミドルリーダーとしての資質向上をめざして～

授業力養成講座は、ミドルリーダーの育成のため、各校の中堅教員を対象に、授業の在り方や参観の仕方、協議会の進め方などを研修できる機会として、平成二十二年度より開催しています。講座は、講師を招聘し講義形式で進める授業力養成講座Ⅰと、実際の授業を参観し、授業協議会を通して授業の在り方を学ぶ授業力養成講座Ⅱを行いました。

授業力養成講座Ⅰ（夏期講座）

【東三河】
○期　日　八月二十三日（水）
会　場　豊川市音羽庁舎
講　師
・生活科
四天王寺大学准教授
原田　三朗　先生
「ラウンド・スタディ」
・数学科
愛知教育大学准教授
青山　和裕　先生
「主体的・対話的で深い学びの視点からの算数・数学の指導の見直し」
受講者　三十名

【西三河】
○期　日　八月二十四日（木）
会　場　安城市教育センター
講　師
・数学科
愛知教育大学准教授
青山　和裕　先生
「主体的・対話的で深い学びの視点からの算数・数学の指導の見直し」
・総合的な学習の時間
愛知教育大学教授
加納　誠司　先生
「総合的な学習の時間を創る探究モードの授業改善」
・体育科
知立市立竜北中学校長
丹羽　康二　先生
「授業を考えるのは楽しい～粟津先生の授業研究を通して、共に授業力向上を目指しましょう～」
受講者　八十六名

本年度も魅力あふれる講師の先生方をお招きし、授業づくりに対する実践的な理論について学びました。

講師の先生方から、探究型の授業をめざすための改善ポイントや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての指導の見直しの視点などを、具体的な例を交じえながら教えていただきました。二学期に向けて、自分の授業を見直していこうという気持ちを高める受講者の姿がありました。

授業づくりについて考えを伝え合う様子

受講者の声

・今までは、教師の基準にあてはめて授業をしてきてしまい、立ち位置が間違っていたと思った。一人一人の自己実現を手助けしていくというスタンスを大切にしていきたいと思った。（東三・生活）

・今まで疑うことなく「正しい」と思って進めてきた授業展開や授業づくりについて、疑いの目をもってもう一度考え直すきっかけとなった。「学校や先生に子どもを預けることにどれだけの価値があるのか」を自分自身に問いかけながら、まずは算数・数学の授業実践について考えていきたい。（東三・数学）

・授業の構想を練るにあたって、事前の準備が大切であると感じた。子どもの願い、実態、教師の願いをどう具現化しながら行えるか。まず、自分が楽しむ、そして、子どもたちがワクワクし、楽しんでいる様子を思い浮かべて授業をつくろうと思った。（西三・体育）

授業力養成講座Ⅱ（秋期講座）

【東三河】
○期　日　十月六日（金）
会　場　豊川市立赤坂小学校
講　師　原田　三朗　先生
授業者　鈴木　志歩　先生
二年　生活科
受講者　十三名

○期　日　十月十三日（金）
会　場　豊川市立代田中学校
講　師　青山　和裕　先生
授業者　中村　貴亮　先生
二年　数学科
受講者　十五名

【西三河】
○期　日　十月二十日（金）
会　場　安城市立篠目中学校
講　師　青山　和裕　先生
授業者　大久保輝聡　先生
二年　数学科
受講者　二十八名

○期　日　十一月十六日（木）
会　場　知立市立知立南小学校
講　師　丹羽　康二　先生
授業者　粟津　慎一　先生
四年　体育科
受講者　十八名

○期　日　十一月二十一日（火）
会　場　安城市立桜林小学校
講　師　加納　誠司　先生
授業者　伊吹　拓実　先生
五年　総合的な学習の時間
受講者　三十七名

東三河二名、西三河三名の先生方の授業を参観しました。どの授業も、子どもたちの意識や考えをもとに授業を展開し、タイミングよく教師支援を講じることで、さらに深く考えられるようにしていました。授業後の研究協議では、講師の先生にファシリテーターを務めていただきました。自分の経験をもとに、授業分析をし、さらに学びを深めるための教師支援の在り方やタイミングについて熱く語る受講者の姿があり、実りある時間となりました。

グループで話し合ったことを全体に発表する様子

受講者の声

・教師からの一方通行的な授業ではなく、生徒の思いから問いが生まれて深めていく授業のつくり方を学ぶことができた。知識の習得を目的とするとしても、課題を解決するためにどのような知識が必要なのかを生徒が感じられるように展開を工夫していきたい。要所要所に統計的確率、数学的確率を比較するような声かけが交えられており、ちょっとした声かけひとつでも思考を深められることを再確認した。（西三・数学）

・体育授業の在り方を学ぶことができた。児童への願いをもって単元を計画し、児童に寄り添った意図のある手立てをもって、今後の授業に臨みたい。そして、学んだことを若い世代にも伝えていきたい。（西三・体育）

・教師の出、どのタイミングでどう切り返すのか、自分が考えていた案とは違った視点の意見があり参考になった。あらゆることを想定し、切り返しを考えておく必要があると感じた。（西三・総合的な学習の時間）

教育随想（94）

六階の窓からエールを送る
～伝統の継承と時代の創造～

蒲郡市教育委員会
教育長
壁谷　幹朗

教育長室は、市役所の六階にあります。窓からの眺めは季節や天候によって変わりますが、絶景です。私の目の先には、いつも「竹島」があります。

コロナ禍にあっても、私は教育行政の経営の柱として「伝統の継承と時代の創造」を掲げてきました。学校文化のもつ伝統を受け継ぎながら、今を生きる子どもたちと共に新しい時代を創りあげたいと挑戦しています。

本年度、これまで続いてきた二学期制から三学期制に移行しました。

令和六年度からは、市内全七中学校区でコミュニティ・スクールがスタートします。

また、市内の二地区において、学校と公民館や保育園などの複合施設の建築が始まります。このうち小中一体となる市内初の義務教育学校では、新たな教育体系を構築していきます。

こうした教育環境の変化への速やかな対応はもちろん、新時代の特別支援教育を見据えた施策も進めます。将来の市内小学校の建て替えの際、市立で特別支援学校の小中学部を同じ敷地内に設置する方向で考えるなどです。

ところで、私の手元には本市の元教育長松井史郎先生が書かれた教育長だより『六界の窓』があります。先生からの教えの原点は何か。それは、「授業づくりの難しさとやりがい」であったように思います。「授業は自在にならぬもの」と、先生からはよく聞かされました。

私が教育長に就任した二年目の四月から、私も教育長だよりを綴るようにしました。松井先生のように惑える衆生に光を当てるような窓にはなれませんが、せめて蒲郡の全体を見渡せるよう、『六階の窓』としました。ひと月に一枚、定例校長会議の資料としてお配りしています。

毎回、「今月のキーワード」として、そのときどきの私の思いを伝えるようにしています。主に管理職の先生方へ向けた学校運営についての、私の経験を中心にした内容です。

私たち教師の生命線は「授業づくり」にあります。その大切さを改めて実感している今だからこそ、若い先生方へ受け継いでもらいたいと強く思っています。「授業づくり」のために、いかにして、教師としての技量を高めていくか、このモチベーションを持ち続けてほしいと願っています。

以下、いくつかを紹介します。

▼改めて自分の授業を振り返る　十月号
後期スタート！　楽しさを実感できる授業づくり　～問い続ける子どもの姿～

▼論文執筆への意欲を高める　十一月号
書くことは自分を語ること
～教育研究論文のすすめ～

▼学び続ける教師になるために　二月号
新任予定者との面談から思うこと
～大村　はま氏の著書から学ぶ～

たよりには、左上にある題字（みよし市立三好中学校長　吉田祐示 作）を使っています。窓から眺めると市内全七中学校区の子どもたちの素敵な笑顔が飛び込んでくるデザインです。

今の時代、教師は何を語り、子どもたちは、何を胸に刻んだらいいのでしょうか。私自身の課題として、皆さん方へのエールとして、これからも問い続けていきます。

編集後記

「人と接するときは春のような温かい心で　仕事をするときは夏のような燃える心で」

本校の校長室の壁に掲げてある言葉です。年度末にはいつもこの言葉が実践できたか振り返っています。本年度もそんな時期が近づいてきました。

ここに令和五年度の最終号をお届けいたします。この一年間、貴重な原稿をお寄せいただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。また、「教育みかわ」をご愛読くださった皆様、本当にありがとうございました。

皆様の日々の教育実践に役立つ会報誌となるよう、今後とも努めてまいりたいと思います。

表紙の写真
「地域へ出向いての
生徒会あいさつ運動」
撮影　豊田市立朝日丘中学校
坂本　晃伸 先生